

……とにかく
女に飢えていた

グ
ン

グ
ン

グ
ン



俺の名前は
亀頭 語呂夫【かめがしらごろう】
温泉宿の派遣社員だ

グ
ニ
ン

今日は世間一般で始まる
長期休暇に備え
宿の大掃除をしたが
予想を上回るボロさだった

グ
ニ
ン



ホコリと虫にまみれ
目立つ場所を掃除したが
サビやカビがひどい
重労働だった

グ
シ

しかもTVじや
旅行キャンペーンの再開延期とか
ほざいてやがる
骨折り損のくたびれ儲けた

グ
シ

やっつてられない
職を変えるいい時期か
そんな事を考えていると

ズ
イツ

ふと旅館の入口に
タクシーが泊まる音がした

お客かな？

A digital illustration of a traditional Japanese village at sunset. The scene is dominated by a large, two-story building with a tiled roof, situated on a raised platform. The building's walls are a mix of light-colored plaster and dark wooden beams. The roof is dark and textured, with a small decorative finial on top. The sky is a mix of orange, pink, and blue, suggesting the time is either dawn or dusk. The overall atmosphere is warm and serene. The text '孤独のテゴメ' is overlaid on the central part of the image.

孤独のテゴメ

少女が一人
タクシーから降り立った

ス
キ
ャ

今日はついでると
ほくそ笑んでいたら



マスクをして
スマホで自撮りしだした

俺は思わず身を隠す



「はーい皆さん
龍ヶ崎姫乃
「りゅうがさき
ひめの」
です！」

ニッコッ

「ここが例の秘湯です
直接現場にやってきました！」

温泉ソムリエとして
噂の真偽を確かめたいと
思いまーす！
乞うご期待！」



何やら挨拶を
ひとしきりした後
スマホをしまつて
こちらにやってきました

どうやら
ユーチューバーつて
ヤツらしい



今すぐ怒鳴ってやろうと
思ったが
思いとどまった

うけつけはー

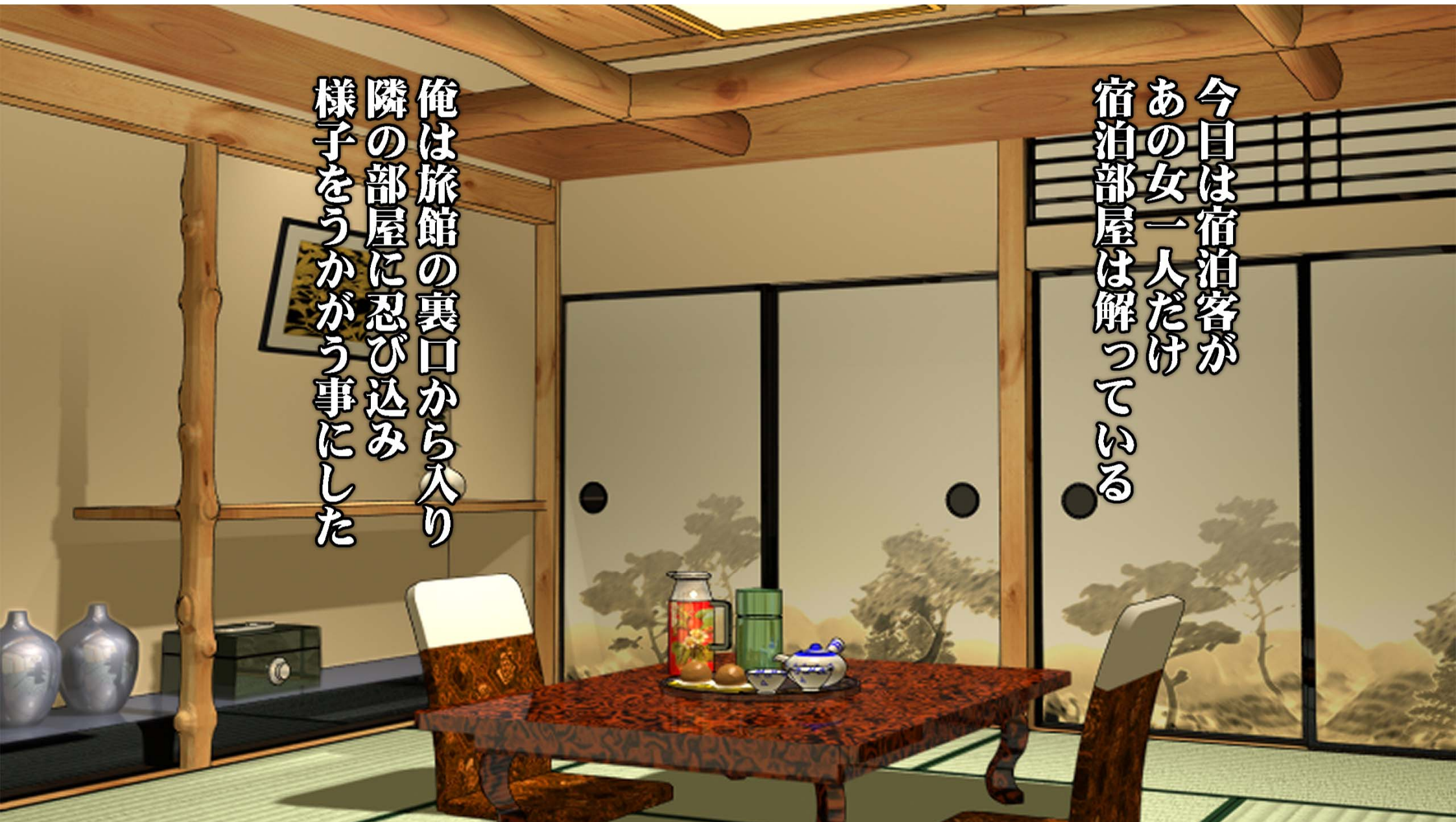
どっせだー

焦るんじゃない
俺は女に
飢えているだけなんだ



今日は宿泊客が
あの女一人だけ
宿泊部屋は解っている

俺は旅館の裏口から入り
隣の部屋に忍び込み
様子をうかがう事にした



隣の部屋から
大声で話す女性の声が
聞こえてきた

配信 配信っ

スマホを
おいて

さつきの奴だ
早速着替えて
どうやら
撮影中らしい



「ほーい
リスナーのみんなーっ
見て見てえ
浴衣だよーっ！」

「景色最高ーっ！
都会の疲れが
一気に消えるねーっ
温泉最高ーっ！」



「WiFi弱いから
生中継ライブできなくて
ごめんねーっ」

動画は

戻ったら

あげまねー

「温泉入浴動画も
コッソリ撮るかも
しれないよーっ
楽しみにねーっ！」



おいおい
そんな話聞いてないぞ
許諾無しかよ

かたずけ
てっど

見つけたら
スマホ取り上げなければ
いけないな

もし社会規範を逸脱した
動画撮影に使われたとあつたら
この旅館の名に
傷が付くじゃないか



「んじやそろそろ
温泉撮影に行くか」

「よーい
本番!!」

ほほう
早速チャンスだ
付いて行こう



さて、浴場に入った

温泉の前に
体を洗うとは
良い心がけだ

ゴブゴブ
ゴブゴブ

ゴブゴブ
ゴブゴブ

そこは俺の
盗撮ポジションだ



岩の隙間に仕込んだ
小型カメラの
画像をチエツク

旅館の主人が
コツソリ付けたものだが
構いやしない

シュフフフフフ

映像は
壁の裏にあるモニターで
チエツクできる仕組みだ



ひとしきり体を流すと
座り込んだまま
動かない

何か気になる事でも
あったのか？

ふふふ

。。。
まさかこのカメラに
気づいたか



じょろろ
じょろろ
じょろろ

ははっ放尿かよ

浴場に一人だけだと
冷えるからな

シャワーで
体を温めて
もよおしたか



そういう客はよくいるが
コイツは公衆衛生に頂けない

ちよろ

ちよろ

ちよろ

特にこんなご時世じゃ
下手すりゃ
営業停止になりかねない



一旦録画を止め
部屋を出て浴場に入る

ここから先は撮影禁止だ
従業員通路からなら
音もなく忍び込める

ふ

ほう、と尿を終えた瞬間
声をかけた



「気持ち良かったかい？」

少女ははっとこちらを見返した
ここで大声を出されてはたまらない
因果を合める

「静かにするんだ
公共の温泉に
こんな事したら犯罪だ
解ってるだろう？」

呆気にとられて
声も上げられないらしい
さらに言葉を続ける



彼女は答えない

あ…
の…

「そしたら女としても
ユーチューバーとしても終わらだ
そんなの嫌だろう?」

これだけ脅しても
何の反応もない
なめてんのか



「この！」
「ひああっ！」
乱暴に胸を揉みしだいたら
ようやく声を上げた

「ゴメンナサイ
ゴメンナサイ」

いい声で鳴くじゃないか
こういうのは最初が肝心だ





はあ？

はあ？

もみ

もみ

だんだん顔が赤く
息が荒くなっている
乳首も立ってきた

丁度手の平に
収まりのいいオツパイで
どうやら感じているらしい

「うっうっ
どうしてこんな事
するのぉっ」

そりゃあ
感じてもらうために
決まっている

自分だけ勝手に
イっつてしまうのなんて
オナニーと一緒にやらないか



「もう充分
揉んだでしょ
いい加減
終わりにして」

はあ、

はあ、

もみ、

もみ、

今なら
秘密にしておいて
あげるからあつ」

…ダメだコイツ
自分の立場を
解っていない



「今なら秘密とは何だあ?」
乳を横に引っ張って揉みしだく

「痛いっ」

「まだ始まったばかりなんだよ
いいからそのまま動くな」

「ぶっっ」

よしよし
また大人しくなった



そろそろ下も準備ができたろう
股間に手を伸ばす

「どい触ってるのよ!?!」

ニョキ

えわっ

×××

「どこだか自分で言ってみな」
「...」

黙って顔を赤らめている
可愛いじゃないか



下の毛も綺麗に剃ってある
最近の若い子は
陰毛の処理も完璧だ
コスプレとか
やっっているのだろうか

「きれいな色してるじゃないか」

「変なトコ見ないでっ」

さわ

さわ

変なものか
獲物は充分吟味して
見定めるのが
俺の流儀だ

クリトリスに
指が当たったと同時に
乳首を摘まむ

「ヤッ！」

ざわっ

体がピクンと震え
思わず声が出たようだ



若く健康な体は
こうでないといけない
良い感じに
仕上がってきてるじゃないか

クリトリスと
乳首を責めていく

さわ

さわ

肌が上気し
鼓動が高鳴っているのが解る



「いいからそのまま
力入れずに身を任せな
気持ちよく
なりたいたらどう？」

「気持ちよくなんか…
ないっ」

ん
ん
ない
た
わ



息が乱れ
喘ぎ声が出始めた

穴からマン汁まで出して
これで気持ちいが良くない
訳がない

ひうっ

はあ

はあ

はあ
はあ

ぬ
ひゅ

「お前の体は感じてるじゃないか
下の口から涎まで垂らして
目を開けて見てみるよ」



「恥ずかしい汁が
割れ目いっぱい
満ち溢れているぜ」

「そんな訳ない
私初めてだから
感じるハズがない
気持ち悪いだけっ！」



「じゃあ確かめてやるよ」
処女なんて最高じゃないか

ええい！ こんだ
入っちゃまえ

んん

ゆほ

まずは指を突っ込んでみる

んんん



成程
コイツは絞めつけてくる

指に吸いつく感覚が
たまらない



「入れられた…
何で…私…」

はあ

はあ

はあ

若くて正直な体だ
存分に触れて
若返らせて貰おう





ちようどいい感じに
マンコが
ヌルヌルになった

ビクッ

はっ

はっ

はあ

舐めるにふたなる

ビクッ